

撮影／魚本勝之 文／黒羽真理

# 誰もが気軽に集まれる、「居場所」としての農地を目指して

生態系の保全や農村の活性化など、農業問題は都市住民にとってもひとつのことではない。東京都国立市のNPO法人「くにたち農園の会」は、地域に残る農地をオープンにし、住みよい街づくりを目指す活動を続けている。くにたち農園の会の姿から、都市にある農地の可能性や、市民の農への関わり方を探る。

## 田畑が生む、多様性

訪れたのは、くにたち農園の会が運営する「コミュニティ農園」に。私たちはたけんぼ。国立府中インター直下、谷保地区の田園地帯

に位置し、農園の横を流れる府中用水にはカエルやドジョウといった多様な生態が息づく。さらにはリトルホースや烏骨鶏が飼育され、都心から1時間以内とは思えない、のどかな風景が広がる。

電柱がなく、高い空と田畑が広々としたこの場所では、四季

折々、農と食のさまざまな体験を

しめ、毎年子ども

から大人まで、七

千人以上が訪れて

いる。

平日は不登校の

子どもたちのため

の「フリースペー

ス はたけんぼ」

や「森のようちえ

ん 谷保のそらっ

こ」など、子ども

たちの居場所とし

て使われ、土日は

親子や大人向けの

稲作や畑体験とい

った農体験プログ

コミュニティ農園くにたちはたけんぼ



ラムのイベント拠点として、幅広く活用されている。

この日は雲ひとつ

ない晴天で、「はた

けんぼ」の子どもた

ちが烏骨鶏と追いか

けっこしたり、たき

火を囲んで談笑する

姿があった。

「フリースペー

スはたけんぼ」は、コ

ロナ禍の休校で、行き場をなくし

た子どもたちのために2021年

にスタート。畑仕事や動物の世話

をしたり、訪れる人と交流する中

で、子どもたちが心を解放でき、

保護者もひと息つけるような居場

所を、と考案された。

授業再開後は、学校に行きづら

さを感じている子どもたちのため

に活動を続けている。地元の学校

とも連携し、この場所に来ること

が出席扱いになる。さらに、イベ

ント時には学校の先生たちも訪れ、

学校とは違う子どもたちの表情を



くにたち農園の会、農園事業代表の武藤芳暉さん

見に来ることもあるのだとか。

何より、開放感あふれる田畑に

いると、教室では気になっていた

悩みも、つい忘れてしまう。

「以前『はたけんぼ』に来てい

た子で、よく泣いてしまう子がい

たのですが、ここだといろんな音

がして、泣き声が室内のように目

立たないんですね。周りもあまり

気にしないので、本人も次第に気

持ちが外向きになっていきました。

子どもたちが自然や生き物たちと

触れ合うことで、精神的にも肉体的

にも自信をつけ、良い方向に変

◆うおもと・かつゆき 1960年愛媛県生まれ。グラフィックデザイナーとして活動する他、「都市と人」をテーマに写真作品を制作。  
◆くろは・まり 育児雑誌編集部を経て、フリーライター、編集者。子育て、女性と仕事、農的な暮らしなどをテーマに活動。

化していくのは、そばで見ていても、すごくよくわかるんです」

そう話すのは、くにたち農園の会、農園事業代表の武藤芳暉さん。自身も大学時代にこの会と出会い、田畑のある暮らしの素晴らしさに目覚めた。

農業の良さを多くの人に伝えるべく、卒業後も活動に加わることを決めた武藤さんだが、ここに来るまでは、畑や土とはあまり縁のない生活だった。

「僕自身は渋谷区で育ったのですが、幼い頃から人ごみがあり得意ではありませんでした。大学の時、友人に連れられて、こんなすてきな場所があったんだ！と夢中になって。農業は自分の気質にあっていたのだと思いますね」

また、家庭内で不登校問題を抱えるなど、当事者であったこともあり、子どもたちの健全な育ちや自然との共生などについては、以前からよく思いを巡らせていた。

「週末に行っている、親子田んぼ体験は、都心から参加する親子も多いのですが、暗い顔をしている子どもがいると気になりますね。元々僕自身も居場所を求めてこの場所にたどり着いたので、居場所をつくる側にまわった今、もっと活動を盛り上げられるように貢献していきたいと思っています」

## 都市農園の課題と可能性

くにたち農園の会は農園事業と子育て事業を活動の2本柱に、地域や行政、企業などと関わりながら活動を行っている。農園事業では今回訪れた「コミュニティ農園」に私たちはたけんぼ」以外にも、さまざまな活動を展開。貸し農園である「コミュニティ菜園 みんな畑」もそのひとつで、農具や自家製の有機肥料が完備され、気軽に畑仕事を楽しむことができる。

全国的にシェア畑の人氣が高まったり、食農体験を重視する人たちが増える一方で、農地面積は減少傾向だ。1960年から2021年までの間に、全国で約28%の農地が減少したことが農林水産省の調べでわかっている。

「僕がこの活動に参加するようになって10年近くたちますが、この一帯の田畑の面積もどんどん狭まってきています」と武藤さん。使われなくなった農地は宅地として転売されるケースが珍しくなく、「はたけんぼ」のすぐそばにも、新築物件が建ち並ぶ。

「僕たちが農地を買い取れたらいいのですが、課題が多く非現実的です。農地を少しでも多く残す

には、相続人が貸してくれたり、自治体が買い取って保全地にするしか手段がないんです」

活動を続けるにあたっては、地元の人たちと対話を続けられる人材を育てることも大きな課題だ。

「この活動は周囲の農家や地主さんとの関係が要ですが、関係の構築は容易ではありません。数年前から地域の方に任せていただいている田んぼがあるのでありますが、僕が作業するようになると、農家の方たちが『農家出身でない若者が、大丈夫か?』と様子を見に来るようになって。地道に続け、3年目くらいからようやく認めてもらえた感じがありますね」

時間をかけてつくってきた場所だが、ゴールはもう少し先だ。「活動資金が必要なので、農体験プログラムなどの収益を出せる活動をより安定させることが課題

だし、支援も集めたい。地域のための活動が仕事として成立し、自身の子どもを育てられるだけの経済的な循環ができれば、一つの新しい地域モデルとして確立できるのかな、と思っています」

とはいえ、このまま農地の減少が続けば、会の存続自体が危ぶまれてしまう。

「行政などの後ろ盾が得られず、畑がなくなったら悲しいですが、それが社会の総意なら仕方ないです。僕らなりに農地を残すための活動を続け、できる限りのことはやっていると 생각합니다」

それでも、多くの人にもう少し自分の住む地域へ意識を向け、世の中で起きていることを見つめてほしい、と続ける。

「社会で起きていることは、結局は日々の行動が積み重なった結果だと思っんです。みんながもつ

性を持って  
わるのか  
すつ、そ  
ろうよつ  
に  
えている  
や、それ  
誰も暮  
ピントと

2024年  
1月号  
生活と自治  
No.657 定価100円(税別)

◆食と農の未来に向けて、日本の農政は何を目指すのか ◆誰しもが気軽に採れる、「居場所」としての農地を目指して  
闘っていました! 千葉商科大学人間福祉学部准教授 小口広太さん

◆44 Myオビニオン  
フクチマミさん  
(東京都、「おうち食教育はらみず」運営) 第3回

◆24 この人に聞きたい  
谷山博史さん (沖縄料理プロジェクト発起人) 第1回

◆29 ものづくり講師  
マルモ青木味噌醤油醸造場  
【徳州田舎みそ(こうじ、こし)、国産十割こうじみそ 他】

◆47 クイズで遊ぼう!  
図書カード2000円分が4人に1

